

わたしのくらし 地域の歴史⑮ 熊川銀座のにぎわい

—今ではその面影もありませんが、大正から昭和初期にかけて現在の熊川通り（熊川駅南西、熊川元気ひろば近くの福生院前から熊川神社西側を通り、睦橋通りを渡り石川酒造へ至る道。当時は奥多摩街道、青梅街道とも言われていた。）にはたくさんのお店が並び、たいへんにぎわっていたそうです。平成26年12月14日と27年3月8日に行った白梅歴史懇話会での黒沢吉信さんの報告や皆さんからのお話、地域の方への取材を通して、簡単にまとめてみました。—

熊川通りにバスが走っていた

熊川通りにはバスが通っていました。五王バスという会社のバスで五日市から立川まで行っていました。こんなに細い道をバスが通っていたのかと驚きですが、8人乗りくらいで、今のマイクロバスくらいの大きさだったようです。

運賃は定かではありませんが、とても高かったそうで、白梅歴史懇話会（以下「懇話会」という。）の席上、このバスに乗ったことがある方はお一人だけでした。

昭和初期の商店の様子？

3ページの図は懇話会で作成した商店図で、熊川分水に親しむ会が平成24年12月に発行した『語り継ぐ熊川村・熊川分水の歴史 昭和初期の熊川分水付近の商店図 歴史学習の記録と古者からの聞き書き』（改訂版）にある昭和初期の商店図を元に、懇話会での皆さんからの情報を元に修正を加えたものです。

この図に従って、熊川の商店の様

子をたどっていきましよう。まずは牛浜との境から見て行きます。

旅館「かどや」と「とらや」

五日市街道沿いに2軒の旅館がありました。「かどや」と「とらや」です。なぜここに旅館があったのでしょうか？ 皆さんからのお話ではかどやのところは牛浜の渡りで、船がそこへ着いた。奥多摩の方からいかだを組んで来た人達がかどやで泊まって東京や川崎のほうへ行ったのではないかと。また、五日市街道と青梅街道の交差点で、牛浜宿の中心だったので、かどやととらやという2軒の旅館が必要だったのではないかと、このことです。

後藤米屋下駄屋は先代が下駄屋で、その後米の配給所をはじめ米屋になったようです。

森田饅頭屋はハケっぶちにありました。子どもの頃、よく買いに行っていたという方もいらっしゃると思います。

移転した熊川駅

五日市鉄道拝島〜五日市間が開通したのは大正14年です。熊川駅ができたのは昭和6年です。そのため3ページの地図（昭和3年）には熊川駅がありません。熊川駅は多摩製糸（昭和4年、森田製糸から事業を引き継いだ片倉製糸の系列会社で、地域の方々は「多摩」と呼んでいたようです。）など地元の製糸会社や地域住民の熱意と徳財で開設されました。当時の駅は現在の位置ではなく二百メートルくらい多摩川に寄り、た奥多摩街道の踏切際にありました。その後、利用が増える車による結核の増えで奥多摩街道の踏切にか



写真提供：黒沢吉信氏

熊川銀座の商店

熊川通りが五日市線とぶつかるところ（熊川一〇三六番地付近）には踏切がありました。その踏切のところから拝島方面に向かって右側に吉沢自転車店、千歳屋（呉服）、関駄菓子屋、左側には西村商店、天野下駄屋、島田仕立屋がありました。千歳屋は呉服の他、荒物雑貨なども扱っていたようです。後に奥多摩街道ができるまで街道沿いに移転しました。

熊川通りからちょっとはずれてぼう屋（農器具の柄の販売・修理）、わら屋（わらを売っていた？）、森田板金（現在の森田板金工業所）、やねじゅう・森田ポンプ屋（現在の森田工業所）、森田砂利屋などがあります。

ぼう屋は農器具の柄を販売・修理していたそうです。



写真提供：黒沢吉信氏

ってしまうため、また新奥多摩街道新設のため昭和37年に現在地に移転しています。